

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520021

研究課題名(和文) 倫理学における普遍主義の再検討 物語論、判断力論の視点から

研究課題名(英文) Reconsidering the Universalism in Ethics: from the Viewpoints of Narrative and Judgment

研究代表者

八幡 英幸 (YAHATA, Hideyuki)

熊本大学・教育学部・教授

研究者番号：70284718

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は次のことを示した： 普遍主義的な倫理学理論は、物語や反省的判断力がもたらす多様な人間的経験の包括的理解なしには機能しない。 物語と反省的判断力は、ある種の観想的な快の感情に導かれ、多様な偶然的要素を包括する新たな秩序を生み出すという共通の機能を持つ。 カントの倫理学理論の場合、そうしたものの接点は定言命法に即して吟味されるべき個人の格率に見出される。 R. M. ヘアの場合、同様の接点は批判的な道徳的思考によって選ばれるべき直観的レベルの諸原則に見出される。 応用倫理や道徳教育の諸課題に対処するためには、一方では普遍主義的な道徳的思考が、他方では多様な人間的経験の理解が不可欠である。

研究成果の概要(英文)：This inquiry shows: (1) universalistic theories of ethics do not work without the comprehension of various human experiences that narrative or the reflective power of judgment provide. (2) Narrative and the reflective power of judgment have a common function to create new orders that will include manifold accidental elements, being led by a kind of contemplative pleasure. (3) In the case of Kant's ethical theory, a point of contact with them is found in individual maxims that should be examined in line with the categorical imperative. (4) In the case of R. M. Hare, a similar point of contact is found in the principles of the intuitive level that are to be selected through critical moral thinking. (5) To cope with problems in applied ethics and moral education, we need universalistic moral thinking on one hand, and the understanding of various human experiences on the other.

研究分野：人文学

キーワード： 普遍主義 物語 判断力 格率 原則 道徳的思考 人間的経験

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 倫理学における普遍主義とそれに対する批判

近代の多くの倫理学説にとって、その規範理論の普遍性はむしろ自然な要求であった。ところが、特に 20 世紀後半から、そのような倫理学における普遍主義に対し、共同体主義などの立場からの批判がくり返し行われてきたことは周知のとおりである。たとえば、A・マッキンタイアは次の二点を強調している。

「第一は、あらゆる道徳はつねにある程度、社会的な地域性と特殊性に結びつけられているので、近代の道徳がもつ、あらゆる特殊性から解放された普遍性への熱望は幻想だということである。第二は、ある伝統の要素としてでなければ、諸徳を所有する方法はないということである。」(『美徳なき時代』)

ところが、20 世紀後半は、上述したような普遍主義への批判が行われる一方、カントの普遍主義の精神を受け継ぐ新たな規範理論が提唱され、大きな影響力を持った時代でもあった。その代表格は、R・M・ヘアの道徳哲学と J・ロールズの正義論である。彼らはいずれもカントの普遍主義の精神を受け継いでいるが、カントが規範理論としては義務論を選択したことや、その正当化の根拠を超経験的なものに求めた点については、それぞれ別の選択肢を提示している。

それゆえ、現在もなお問われているのは、このような倫理学上の普遍主義の流れとそれに対する批判をどのように受け止め、今後の規範理論の構築につなげていくかということである。この問題に対してどのような態度をとるかは、生命倫理や環境倫理、道徳教育といった現実の社会問題への対応にも大きな影響を与えるはずである。

### (2) 物語論および判断力論への着目

このような問題を考える上で大きな手がかりになると研究代表者が考えたのが、物語論および判断力論の視点である。一方では、物語論の視点は、共同体主義などの立場から普遍主義を批判する論者の多くによって共有されている。ところが、その一方で、物語論の視点と判断力論の視点のあいだには密接な関連があると言われている。例えば、貫成人氏はその著作『歴史の哲学：物語を超えて』(2010)において、P・リクールらの主張を参照しながら次のように述べている。

「カントの言う「反省的判断」は、当該現象の諸側面をふまえて全体を把握し、新たな規則、新たな個別的因果関係を生み出す能力であり、その母胎となるのが「生産的構想力」による「図式化」である。物語の進行を支える自明の理や全体のプロットは、カントの意味での反省的判断力によって選択され、確立される。」(上掲書)

加えて、研究代表者がこれまでに行ってきた研究の成果から言えば、判断力論の視点は

普遍主義の倫理学にとって不可欠である。このことをさらに踏まえて言うならば、判断力論の視点は、倫理学上の普遍主義を支える一方で、普遍主義への批判のベースとなる物語論の視点にも深く関係するという微妙な位置を占めていることになる。本研究において、物語論および判断力論の視点から普遍主義的な規範理論の評価の見直しを図ることを試みたのは、以上のような理由からである。

## 2. 研究の目的

### (1) カント以降の普遍主義的な規範理論についての判断力の意義の明確化

本研究では、近現代の普遍主義的な規範理論を代表するものとして、カント倫理学、R・M・ヘアの道徳哲学等を取り上げる。これらのうち、ヘアの道徳哲学の基底をなす普遍化可能性の原理と判断力の関係についてはすでに一応の検討を加えている(論文「倫理学における判断力の問題(序説): 普遍化可能性と特殊性」(2010))。今後は、同様の検討をより詳細に行っていく必要がある。

### (2) 物語論と判断力論の関連の明確化

これまで、この両者の関連についての指摘は、主として物語論の側からなされてきた。本研究では、これに対応する論点を判断力論の側からも引き出していく。応募者は、論文「倫理学における判断力の問題(続): 物語と判断力の関係を中心に」(2011)で、素描的ではあるがこの作業に着手している。今後は、カントの判断力論がその歴史哲学や人間学に関連していることをも視野に入れながら、この方面での研究を充実させていきたい。

### (3) 普遍主義的な規範理論の評価の再検討

本研究ではさらに、(2) および(3) に関する研究の成果を踏まえ、近現代の普遍主義的な規範理論の評価の見直しを試みる。その際、カント倫理学の現代的意義についての考察が一つの鍵となるだろう。これまでその評価は、判断力論や歴史哲学、人間学などとの関係を捨象した形で争われることが多かったが、本研究の視点から言えば、この点は修正されなければならない。このような修正を行い、物語論や判断力論との関係を回復した上で、普遍主義的な規範理論の再評価(特に、応用倫理や道徳教育における位置づけの明確化)を行うことが本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

本研究では、主に文献収集とその検討作業を通じて、研究目的に掲げた三つの作業(1) カント以降の普遍主義的な規範理論についての判断力の意義の明確化、(2) 物語論と判断力論の関連の明確化、(3) 普遍主義的な規範理論の評価の再検討)を順次行っていく。ただし、文献収集やその検討作業の進捗状況に応じ、これらの作業は順番を入れ替えたり、

並行して行ったりする可能性がある。特に、(3)については、研究代表者がこれまで関わりを持ってきた生命倫理や道德教育の諸課題との関係についても考察を行う。そのような考察は、(2)(3)についての研究の深化にも寄与するはずである。

#### 4. 研究成果

##### (1) カント以降の普遍主義的な規範理論としての判断力の意義の明確化

本研究に着手するにあたっての基本的な視座を定めた論文、「倫理学における判断力の問題(序説) 普遍化可能性と特殊性」(2010)以来、様々な側面から明らかにしてきたように、普遍主義的な倫理学理論(普遍化可能性の原理を根底に置く理論)は物語や反省的判断力がもたらす多様な人間的経験の包括的理解なしには成立しない。そのような理解が欠けているとすれば、何が「類似の状況」で、何が「特殊な状況」かが判別できないため、普遍化可能性の原理は機能しないからである。ここで言う類似性、あるいは特殊性は、もちろん物理的観点から見たそれではなく、当面する倫理的課題にとって重要な類似性、あるいは特殊性である。

次に、論文「倫理学における判断力の問題(3) 格率の意義とその形成過程を中心に」(2012)では、カントの普遍主義的な理論の場合、物語的なものや反省的判断力の機能との接点は定言命法に即して吟味されるべき格率に見出されることを明らかにした。カントはそのよく知られた著作『人倫の形而上学の基礎づけ』や『実践理性批判』で、「嘘つきの格率」や「怠け者の格率」、「復讐者の格率」などについて語っているが、これらの格率はそれぞれの人生の物語の中でこそ意味を持つ。また、そのような格率が生じる背景には、道徳法則や定言命法とは起源を異にし、しばしばこれと対立するように思われる世間知、人間知の蓄積が存在する。個人または集団の格率は、そのような世間知、人間知を背景として、反省的判断力の働きによって形成される。

さらに、「倫理学における判断力の問題(4) R・M・ヘアの「二層理論」を中心に」(2014)では、ヘアの普遍主義的な理論の場合、物語的なものや反省的判断力の機能との接点は、批判的な道徳的思考によって選ばれるべき直観的レベルの諸原則に見出されるということを示した。確かにB・ウィリアムズとの応答などから見て、ヘアの思考方法自体には物語的なものへの配慮は欠けている。しかし、ヘアが直観的レベルの原則のサブカテゴリーとして挙げる「特定の役割に共通な原則」や「各個人に特有の原則」は、様々な人生の物語を背景として成り立つものである。また、ヘアの二層理論が抱えるいくつかの問題点を解決するための修正提案(伊勢田哲治氏の「未確定領域功利主義」)を採用するならば、判断力一般の性質(「現

存する規則」がある場合には規定的に、「現存する規則」がない場合には反省的に働く性質)との関係が見えてくるはずである。

##### (2) 物語論と判断力論の関連の明確化

本研究の内容を先取りする形で発表した論文「倫理学における判断力の問題(続) 物語と判断力の関係を中心に」(2011)以来、研究代表者は、物語と反省的判断力の機能のあいだに見出される共通点に注目してきた。

物語について言えば、物語には二つの異なる種類の秩序(時間の秩序と意味の秩序)の結合が見出されるという点、物語が形成(あるいは再編成)される契機となるのは、何らかの偶然的な要素またはそれらのあいだの結びつきの欠如であるという点、物語の創出や享受にはある種の快の感情が伴うという点、私たちは物語の中の登場人物に自らを重ねる場合と、物語の作者や語り手の立場に立つ場合がある点などが注目される。

他方、カント的な意味での判断力(特に反省的判断力)について言えば、それは二つの異なる種類の秩序(自然の秩序と自由の秩序)の媒介者であるという点、判断力はいくつかの偶然的な要素を新たな秩序の下に包摂するという点、判断力はある種の快の感情によって導かれ、快は私たち人間の身体性にその基礎を持つという点、判断力は二つの異なる視点(有限な人間の悟性の視点と、それとは別種の悟性の視点)を持つという点などが注目される。

物語と反省的判断力は、このように非常によく似た特徴、機能を備えている。この両者の働きこそが、私たちが持つ多様な人間的経験の包括的理解、言い換えれば、世間知、人間知の厚みを生み出してきた当のものであると研究代表者は考えている。本研究全体の最も重要な帰結を繰り返すならば、普遍主義的な規範理論は、そのような多様な人間的経験の理解の蓄積があってこそ機能するものなのである。

特に、カントの場合、研究代表者が論文「人間学 道徳哲学との関係を中心に」(『カントを学ぶ人のために』所収、2012)で論じたように、両者のあいだには依存関係とともに対極的とも言える緊張関係が見出される。このことは、カントの刊行著作だけではなく、その講義録等の検討を通じ、いわばそのライフヒストリーに迫った考察を行うことによって明らかになる。書評論文「浜野喬士著『カント『判断力批判』研究：超感性的なもの、認識一般、根拠』(近刊)では、研究代表者がこのような視点に基づいて着手した『判断力批判』の成立史研究(論文「判断力の自己自律 1780年代中期のカントに生じた思想的転回」(『判断力の問題圏』所収、2009))をさらに発展させようとした若手研究者の取り組みについて論じた。今後は、判断力、人間学、道徳哲学(普遍主義的な倫理学理論)

の相互の関連についての研究の輪がさらに広がることを期待される。

### (3) 普遍主義的な規範理論の評価の再検討

論文「倫理学における判断力の問題（序説）」(2010)から「同(4)」(2014)に至る論考を通じ、研究代表者が確信を深めていった点は、私たちが応用倫理や道德教育などの具体的課題に対応していくためには、一方では普遍主義的な道徳的思考が、他方では多様な人間の経験の理解（これを支えるものとして物語や反省的判断力の機能がある）が必要であるという点である。

このような視点はすでに、生命倫理に関する諸論文（「医療・介護／介助のシステムと人間の倫理」（『生命／環境の哲学（岩波講座哲学第8巻）』、2009）や「医学的介入の論理と障害の概念 「何もしないより、何かよいことをしたほうがよい」か」（『医療の本質と変容』所収、2011））で素描的に示していたものであるが、本研究の過程で、研究代表者は道德教育に関する取り組みにもその視点を生かすことができるのではないかとこの着想を得た。

道德教育については、子どもたちの道徳的思考の力を伸ばすための取り組みが求められる一方で、多様な人間の経験についての理解を育むための取り組みが求められる。本研究を通じて明確化されたこのような視点は、研究者が行っている種々のアウトリーチ活動や、その経験を踏まえた論文「熊本市教育センター教員研修（道德教育）における大学教員と現職教員の連携の試み」（熊本大学教育実践研究 32号、2015）や、論文「哲学・倫理学の研究者は道德教育にどう関わるか」（倫理学研究（関西倫理学会）45号、近刊）に反映されている。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計4件)

八幡英幸、哲学・倫理学の研究者は道德教育にどう関わるか、倫理学研究（関西倫理学会）査読無、45号、2015（近刊）、掲載頁不明

八幡英幸、熊本市教育センター教員研修（道德教育）における大学教員と現職教員の連携の試み、熊本大学教育実践研究、査読無、32号、2015、pp.137-144

八幡英幸、倫理学における判断力の問題（4） R.M.ヘアの「二層理論」を中心に、熊本大学教育学部紀要、査読無、63号、2014、pp.53-62

八幡英幸、倫理学における判断力の問題（3） 格率の意義とその形成過程を中心に、熊本大学教育学部紀要（人文科学）査読無、61号、2012、pp.67-75

〔学会発表〕(計1件)

八幡英幸、哲学・倫理学の研究者は道德教育にどう関わるか、関西倫理学会(2014年度)、2014.11.9、大阪教育大学

〔図書〕(計2件)

加藤泰史、舟場保之編、晃洋書房、カントと現代哲学の潮流 現代カント研究第13巻、2015（近刊） 掲載頁不明（八幡英幸、書評：浜野喬士著『カント『判断力批判』研究：超感性的なもの、認識一般、根拠』（作品社、2014年））

有福孝岳、牧野英二編、世界思想社、カントを学ぶ人のために、2012、pp.343-357（八幡英幸、人間学 道德哲学との関係を中心に）

〔その他〕

（主なアウトリーチ活動）

熊本市教育センター教員研修講師（10年経験者研修・道德教育）(2011年～2014年)

熊本市教育センター教員研修講師（専門研修・道德教育）(2011年～2014年)

熊本市道德教育推進協議会委員（2011年～2014年）

熊本大学教育学部附属小学校研究発表会助言者（2011年～2014年）

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

八幡 英幸 (YAHATA, Hideyuki)

熊本大学・教育学部・教授

研究者番号：70284718